

# 東南アジアにおける生成的コミュニティ

研究代表者 田 辺 繁 治

## はじめに

本研究は、2007～2009年度科学研究費補助金基盤研究（B）「東南アジア大陸部における生成的コミュニティ」の内に位置づけられる。したがって、以下では同課題における背景、目的、方法、成果と合わせて提示することとする。

### 1. 研究開始当初の背景

東南アジア大陸部、特にタイなどにおける従来の社会科学的なコミュニティ研究は構造的、システムの捉え方に基づくものであり、そこには主として二つの流れがあった。第一は、第二次世界大戦後のアメリカの文化人類学的な社会システムの比較研究であり、タイ社会は「緩やかに構造化された社会システム」という概念によって描かれ、日本などの強く規範化された社会システムと対比されてきた。第二は、イギリスの社会人類学者S・タンバイアのタイ農村における仏教や精霊信仰の研究によって代表される1970年代以降の構造主義的な研究であり、コミュニティにおける人々の宗教的世界観、価値観や実践は、要素間の対立する関係の集積として全体論的な構造をなしていることが主張されてきた。

こうした社会システム論と構造主義の流れを受けた東南アジア地域のコミュニティ研究において、コミュニティは国民国家などの大きな社会編成のもとに組み込まれながらも、独自の社会組織や文化的特徴を備えたある種の全体的な構造やシステムをもつものと考えられてきた。しかし、境界によって囲まれた場所的なコミュニティ、そこに形成された文化やアイデンティティを一体的なものとして捉えようとする従来のコミュニティ概念は、20世紀末からの人々の移動、流動、排除の激化や、実体的な社会関係を超越して想像的に構築されるコミュニティやネットワークなどの出現によって根本的な見直しを迫られるよう

になった。

そのような社会的現実の急激な変動を背景にしながら、中心部の「伝統的」農村コミュニティ、あるいは周辺に位置するマイノリティに関する近年の研究は、国民国家とその行政機関、国際機関、NGOやその他の勢力との関係において変動する姿を記述するようになった。しかし、それらの試みの多くも、人々の生の新たな欲望とニーズを直接的に把握し考察するよりも、むしろそれらを従来のコミュニティ概念の延長線上に捉えようとする限界をもつものである。

そこでこの研究は、従来のコミュニティ研究の対象にとどまらず、多様で多角的な志向性と組織形態、新しい協同性と社会性をもつ集団、アソシエーション、ネットワークなどの近年における出現に注目する。そして、これまでのコミュニティ概念にはおさまりきれない人々の欲望、想像力、潜勢力を明らかにし、それらによってコミュニティが変化していく力動的な過程を捉えようとする。この研究は、コミュニティを従来の「存在」するものとしてではなく、何ものかに「成る」、つまり自らを「生成変化」させていくものとして描こうとする新たな試みである。

## 2. 研究目的

この研究の目的は、今日のグローバル化とモダニティの深化のなかで、東南アジアにおける新しいタイプのコミュニティの出現とそれらの特徴づける協同性と社会性の実態を記述し、そこに貫流する人々の欲望、ニーズや想像力が彼らの現在と未来における新たな生の様式を生成していく動態を探求することにある。

本研究ではこのような新しいタイプのコミュニティを「生成的コミュニティ」と呼ぶが、その主な特徴は次の三点である。第一に、生成的コミュニティでは、その内部に個人の多様で差異化したニーズ、欲望、想像力、価値評価が確保され、それは帰属性や同一性を基準として構成される従来のコミュニティの性格とは全く異なっている。第二に、生成的コミュニティは、内部の多様性と差異を維持しようとするが、それを均質化し同一化しながら統治しようとする勢力、特に国民国家やその他のエージェンシーに対する闘争、抵抗、あるいは交渉の局面につねに晒されている。第三に、生成的コミュニティがそうした権力関係のなかにながら存続するためには、状況に即応しながら自らの存立の諸条

件を解釈し再検討しつつ、多面的に自らを変化させ作り替えていく、つまり生成変化することが必要である。

本研究では、以上の点に注目しながら、タイやカンボジアなどにおける生成的コミュニティの実態を具体的事例に基づき明らかにする。

### 3. 研究方法

研究代表者、研究分担者、研究協力者および海外共同研究者各人が、対象コミュニティにおいてフィールドワーク（現地調査）を実施し、それらの事例研究で得られたデータを比較検討しながら生成的コミュニティの実態を明らかにする。

フィールドワークにおいては年度ごとに共通の重点的調査課題を設定した。すなわち、1年目は、コミュニティにおける人々の欲望や生存のニーズの多様性と差異化の実態に注目しながら、それらがいかに語られ、解釈され、実践されるのかを調査することである。2年目は、人々の欲望やニーズを実現させる過程で直面している問題を把握し、それらをめぐる国際機関や行政機関、NGOなどの介入や連携に注目し、そこに発生する対立、抵抗や交渉などの局面を調査することである。そして、3年目は補足的調査を実施することとした。

また、各研究者による個別的調査・研究と平行して、本研究における背景知識を共有し、互いのデータを比較検討するために、1年目は国内において研究者2名を招聘し、研究会を開催した。2年目および3年目にはタイのチェンマイ大学において中間報告会と「生成変化」概念についての勉強会を開催した。最後に、以上のフィールドワークや研究会で得られたデータと知見をふまえ、全員が論文を執筆し、2010年3月6～7日、タイのチェンマイ大学社会科学部において研究成果報告会を開催した。そして、各報告の関連分野を専門とするコメンテーターを招聘し、一般聴衆も含め、今日のグローバル化する社会における生成的コミュニティの実態と意義について参加者全員で議論した。

### 4. 研究成果

まず、研究成果報告会で提出された各論文の概要を紹介し、個別の事例研究から明らかになったことを示したうえで、本研究全体における成果と意義、および今後の展望について述べる。

### (1) 各論文の概要

①阿部利洋（研究分担者、大谷大学）‘Promoting Collective Engagement in the Khmer Rouge Tribunals under the Undesirable Conditions: New Social Movements and the “Community of Becoming” in Cambodia’

阿部は、カンボジア内戦終結後における和解と社会再統合の過程を明らかにするために、被害者たちがいかにクメール・ルージュ特別法廷の審理に参加していくかを解明しようとする。この研究は特に、そこに参加する被害者を支援する二つのNGO、「カンボジア記録センター DC-Cam」と「社会開発センター CSD」の活動に焦点をあて、彼らの活動を詳細に分析することによって社会運動としての特徴を描き出す。そのためのデータは、特別法廷に関する証言聴取プログラムでの観察や裁判関係者へのインタビューによって得られた。

そこで注目したのは、それらのNGOのリーダーたちはクメール・ルージュ支配の時期にタイ国境の難民キャンプに収容された後にアメリカに渡り高等教育を受け、人権思想を身につけた帰還者たちだったことである。彼らの活動の中核にあるのは、内戦の犠牲者の記憶と声を活性化し公的に提示していくことである。こうした活動はカンボジアの仏教や王制の伝統のなかで、あるいは欧米のNGOのみによっては不可能であり、カンボジアと国際社会の双方を背景とする「周縁的」なリーダーたちによって可能となったのである。

これらの活動に参加するメンバーは固定的ではなく流動性が高く、また確固とした特定の政治目的を追求するのではない。彼らは人びとのなかに内戦の記憶を呼び起こすことによって、今日のカンボジア国民が共有すべき新たな意味を作りだそうとする。こうした活動は、政府の介入による組織解体の危機を多様な仕方で乗りこえながら、そこに参加する人びとのあいだに新しい集合性を作りだしてきた。これらのNGOの運動は、政治・社会的な不確定性が支配する今日の状況のなかで、自らをつねに変化させていく「生成変化のコミュニティ」と呼ぶべきものであり、そこに「新たな社会運動」としての特徴を認めることができる。

② Malee Sitthikriengkrai（海外共同研究者、チェンマイ大学）‘From Bio-body to

## Ritual-body : Identity Transformation of Phu Thai Women, Thailand'

マリーは、東北タイ・ナコンパノム県のプータイ人におけるモーヤオと呼ばれる精霊／霊媒に焦点をあてながら、モーヤオ＝精霊が憑依した病者がいかにして霊媒のコミュニティのなかで主体として構成されるか、つまり生成変化するかを論じている。霊媒の治療儀礼を受けた慢性病患者は、憑依しようとする精霊を自らの身体に受容することで病状は快方に向かう。慢性病は「脱領土化」する力であり、患者は家族や精霊とのあいだの葛藤と交渉過程を経て精霊と共存する身体に変換される。こうしたモーヤオ＝精霊は父系的に継承される。父系的系譜をもつコミュニティのなかであって、憑依することになった患者は、精霊と共存する運命を担うことになる。筆者はそうした病者を「生－身体 bio-body」と呼んでいる。

生－身体としての患者は、特定の霊媒のコミュニティ固有のモーヤオ＝精霊への供養儀礼に3年間連続的に参加してコミュニティ内部および外部の人びとと交流することによって、自らを「社会－身体 social-body」へと変換しなければならない。慢性病に陥ることが脱領土化だとすれば、この生－身体から社会－身体への儀礼的な変換は「再領土化」の過程と見なすことが可能である。それによって患者は霊媒のコミュニティのなかに受容されることになる。

モーヤオ＝霊媒に成ることは、ふつうの人びととは異なった感覚を身につけ、あの世と交信し、将来を占う能力をもつことであり、人間と精霊の双方のステータスを生きることである。こうした特殊な感性和実践を身につけることによって、霊媒の身体は他の人びととは異なった「儀礼－身体 ritual-body」へと変換され、人びとにたいして病氣治療や占いを行なうことが可能となる。このようなモーヤオのアイデンティティの一連の転換過程は、終りなき苦悩と死に直面し、排除された病者が自己の主体を表出するための新たなコミュニティを発見することである。それはマジョリティの社会秩序あるいは構造へと回収されることを意味するのではなく、むしろ排除された主体がマイノリティにとどまりながら、協同性とコミュニティを求める闘争なのである。

③ Duangjai Lortanavanit (海外共同研究者、タマサート大学) 'Communities of Becoming : Negotiation on Resource Management of Three Karen Villages in Northern Thailand'

ドゥワンチャイの調査・研究対象コミュニティは、タイ、メーホンソーン県パーイ郡メーヒー行政区の3つの行政村にまたがるカレンの人々からなるコミュニティである。観光産業の拠点であるパーイでは、外部企業による土地開発・リゾート開発のなかで、様々な利害関心が対立し、カレンを含む山地民マイノリティや地元の人々の権利が脅かされるような状況が生じている。1997年の憲法改正と1999年に施行された地方分権法は、地元住民による投票によって市長、市議会、行政区長、行政区評議会を選出することを定め、それまでの中央集権体制に代わり、地域レベルでの政治権力を生み出した。しかし、中央政府との折衝能力を評価されて選出された市長や行政区長は商業的素養をもつ他地域からの参入者であり、地元住民、とりわけ山地民マイノリティの要望に対する関心は低かった。パーイにおける政治的变化は、地元住民の権利保護を推進するというよりむしろ、より複雑な対立状況を生じさせたといえる。

そのような背景のもと、2001年、資源管理をめぐるカレンの人々と外部の開発業者とのあいだに危機的対立が生じる。村人が売った土地を流れる小川で業者が土砂浚渫を行ない、地盤沈下と河岸侵食を引き起こしたのである。これにより、住民は稲作や水牛飼養などの生業において多大な損害を被ることとなった。住民たちは作業トラックが入れないように道路を封鎖するなどの抗議行動に出たが、業者は発砲によってこれを排除した。そこで、彼らは研究者の助言により県知事と国家のオンブズマン・オフィスをはじめとする行政機関に窮状を訴えたが解決策は講じられず、さらに行政区評議会は業者の権利を擁護した。行政機関への陳情、マスメディアによる世論への訴えも効果はなく、最終的に住民は県議会議員選挙の集団放棄という手段をとることになったが、政府中央からの批判を招くことになった。しかしその後、郡知事を動かし、2005年に法廷で要求をとおすことに成功する。彼らは地方分権化の弊害を受けつつ、しかしそのシステムを利用して勝利したということもできる。

住民たちは、NPOやNGOなどの影響を受け、「森を守り、水を守る」というカレンの祖先の教えやキリスト教における神の保護、正しき行動を信念にもつリーダーたちのもとで団結し、闘争を展開してきた。しかしながら、絶え間なく流入する観光ビジネスとそれによる社会経済的变化はカレンの新世代を観光産業における労働力として取り込んできており、外部者に「土地を売らない」という彼らの抵抗、イデオロギーがいつまで維持されるのか、その保証はない。

④ Kwanchewan Buadaeng (海外共同研究者、チェンマイ大学) 'Becoming Khuba Followers: Karen People in a Relocated Religious Community in Li District, Lamphoon Province'

クワンチーワンは、北タイ・ランブーン県を中心として1970年代から顕著となったカレン人によるクーバー（仏教聖者）崇拜運動を分析し、そこに「生成的コミュニティ」としての性格を見いだそうとする。このコミュニティはクーバー・カオピーを中心に、主として1970年代以降、北タイ各地から流入したカレン人によって構成されていた。彼らの移住の理由や時期、クーバーとの関係、宗教的实践などは多様であり、したがって彼らの欲望やニーズも多様であった。しかし彼らは一様にクーバーを崇拜し、自ら持戒するとともに、菜食主義や瞑想などの仏教的実践に参加することによって、クーバーの身近に寄りそい、彼の身体に触り、彼のもつ力の庇護下に暮らしてきた。

1977年にクーバー・カオピーは他界するが、それ以後、弟子であるクーバー・ウォンが崇拜の対象となり、同県内にあるファイトム寺院がその中心となった。カオピーの亡骸はミイラとしてパーナム寺院に保存され、年1回3月のミイラの衣替え儀礼にはクーバー・ウォンをはじめ弟子たちと多くの人びとが参加していた。2000年にはクーバー・ウォンが他界し、その頃から急速な社会経済的な変動のなかで、クーバー崇拜運動も大きく変化した。すでに他界したクーバーにたいする崇拜儀礼には依然としてカレン人や北タイ人が参加しているが、近年ではバンコクなど都市の経営者や商人が中心的な役割を果たすようになった。

クーバー崇拜運動に見られる特徴は、クーバーとその崇拜者たちのあいだの緊密で情動的、身体的な関係である。そこにはドゥルーズとガタリが提示したように、能動的情動（カレン人などの信者）と受動的情動（クーバー）の相互的な作用によって双方の力が増大するという関係性が築かれている。またクーバー・カオピーのミイラの衣替え儀礼に見られるように、そこにはフェティシズムがともなっている。クーバー崇拜運動は、多様な欲望をもってクーバーの身体に寄りそって、クーバーの限らない力を得ようとする生成変化の運動である。

⑤ Apinya Fuengfusakul (海外共同研究者、チェンマイ大学) 'Santi Asoke: the Buddhist Outcast Movement of Thailand'

アピンヤーは、過去15年間にタイの仏教的アウトカースト運動としてのサンティ・アソークに起こった変動に焦点をあてている。アソークの宗教的コミュニティは、都市、農村にわたる多くの自給自足的コミュニティとして展開し、それらはかなりの利益を生みだしている。その組織形態、言葉使用、衣服、仏教的概念の再解釈などに見られるように、アソークのコミュニティは農民文化と中間層文化の特異な混交である。この宗教的アイデンティティの特徴は、反主流的なポストモダン・ブリコラージュとも呼ぶべきものであり、それは過去10年間、ほとんど変化していない。たしかにアソークの集合性と実践のなかには異質な要素のブリコラージュ的な「アセンブレッジ」を認めることができるが、そこに「生成変化」する局面を見いだすことは容易ではないと考えられる。

国家と仏教サンガからの政治的圧力に曝されるなかで、アソークはつねに防衛的、集合的アイデンティティを強化してきた。コミュニティ内部での団結と社会化の過程が強化されたが、その反面、個々のメンバーのもつ個性を発展させる余地を残さなかった。そこには抵抗的な声を許すような余地はなく、むしろ従属的な「主体化」の過程を見ることが可能であり、そうした意味で「保守的」でさえある。

アソークは表面的には、21世紀初頭のタクシン・チナワット政権と和解していた。しかし2006年の軍部クーデターによるタクシン追放以降の政情不安のなかで、アソークに底流する急進的な社会的理想の追求は政治的に表面化することになった。タイにおける「国家＝仏教サンガ」という歴史的に持続する権力システムから排除されたところに展開してきたアソークには、一貫して非妥協的な心性を認めることができる。「急進的保守主義」という言葉こそは、そうしたアソークのコミュニティとしての特徴と、変動する政治状況への反応をもっとも良く言い表しているのである。

#### ⑥古谷伸子(研究分担者、大谷大学)‘Becoming Mo Mueang : Northern Thai Folk Healers in between Giving and Selling Medicine’

古谷は、1990年代初頭のエイズ危機を契機としてNGOの支援のもとでネットワーク化した北タイの民間治療師たちが、相反する価値のあいだでいかに自らの治療実践を変容させ、「モー・ムアン(治療師)」である／になることを模索してきたかを考察する。北タイの民間治療師は、伝統的にクライアントとのあ



いだに互酬的關係を構築してきた。そこでは、治療は人助けのための施療すなわち贈与であり、それは農村における相互扶助的な価値を表現するものであった。このような治療行為の贈与性は、現在、「クー」と呼ばれる師への崇拜とともに、治療師が自らを企業家や商人から差異化する際の指標となっている。そして、彼らは治療師ネットワークという集団的レベルと個人的レベルの両方で、「人助けをすること」と「クーを持つこと」を治療師であることの根拠として主張している。しかしそれと同時に、農村を超えて活動領域を広げた治療師たちは、市場経済のもとで薬やマッサージなどのサービスを売ることによって収入を増大させようと欲望しており、そこでは主張される治療師像からのズレが見られる。

こうして、彼らは一見したところ矛盾する二つの実践、すなわち人助け(贈与)と売買を同時に行ないながら、社会的、経済的、そして道徳的成功を模索している。ただし、その模索の過程は、治療師ごとに異なる個別のものである。治療師ネットワークに参加する各治療師は、それぞれの地元における保健所や病院、行政機関、住民らとの関係のなかで、民間医療関連の活動予算や世間からの注目といった偶然的要因によりながら、経済的に自らの生活の質を向上させつつ、かつ治療師の倫理にかなった治療を実践することを欲している。つまり、収入確保と人助けを両立させようとする。だが、薬を売ることが収入確保へつながると考えながらも、クライアントの困難を前にすると、しばしば売れずに値引きしたり無償で与えるなど、内面的な葛藤をかかえている者もいる。このように、売ろうとしながらも人助けに留まること、すなわち市場経済のもとでのマジョリティを志向しつつマイノリティに留まることは、「治療師になる」生成変化の過程として捉えることができる。

⑦田辺繁治(研究代表者、大谷大学) 'Collective Becoming: HIV Self-Help Groups of Northern Thailand'

田辺は、北タイにおけるHIV感染者・エイズ患者によって構成された自助グループのもつコミュニティとしての特徴を明らかにしようとする。そこで、「自助グループ」の形成期である1990年代、および抗レトロウイルス剤(ARV)治療が大規模に導入された2000年代初頭以降の二つの時期に焦点があてられる。G・ドゥルーズとF・ガタリが提示したように、それらのコミュニティは、人

間やモノを含む異質で多様な要素によって構成される「アセンブレッジ」として捉えられる。寄せ集めの集合としての「アセンブレッジ」の概念は「生成変化」の過程に関係している。生成変化とは、ある者やあるモノが存在する状態にとどまるのではなく、むしろ持続的に他者に成っていくような行為や実践である。

そこでまず、1990年代後半における感染者たちのネットワークや自助グループによる実践や想像力を検討することによって、「アセンブレッジ」と集合的な生成変化の様態が記述される。1990年代中頃にチェンマイに出現した感染者ネットワークや自助グループは、「組織」というよりも、異質な者たちの寄せ集まりとしての「群れ」のような「アセンブレッジ」であった。それは、都市で偶然に出会った異質な感染者たちのあいだに繰り広げられた情動とケアによって展開する関係性とその集合である。彼らは治療や健康管理についての情報を交換し社会的排除にたいして闘うために、情動とケアに基づく関係性を発展させることによって集合的に自らを生成変化させ、力を増大させていった。

しかし、2000年代におけるA R V治療体制の導入にともない、90年代以来の自助グループに属する人びとを含めて、多くの感染者たちは国立病院の「持続的ケアセンター」において感染者グループとして組織されるようになった。そこでは自助グループのような相互扶助関係ではなく、病院、医師、看護師、カウンセラーによる管理体制のもとで、客観的診断や抗レトロウイルス剤投与が実施され、健康の自己管理による規律化が促進される。彼らはA R V治療体制の近代的な医療知識と実践のもとにおいて、ますます個人化され、これまで見られた「アセンブレッジ」とそこに展開した集合的生成変化は消失しつつある。

⑧藤田直子(研究分担者、大谷大学)‘Relation of Mother and Daughter : Trapped between Big City and Home Village’

藤田は、東北タイの農村コミュニティからバンコク近郊のアユタヤ県へと移動労働する女性に焦点をあて、彼女たちと出身村およびそこで暮らす母親との関係を考察する。東北タイの農村では、娘たちが都市部へ移動し、工場などに就職し、そこで得た収入の一部を母親へ送金することが一般的になっている。その背景には、村における貨幣経済化の進展、バンコクとその近郊における雇用機会の拡大、村とは異なる都市生活への憧れがある。しかし、娘たちが移動

労働する動機には、このような経済的要因の他に倫理的要因もある。つまり、養育してくれた母親の恩に対し、娘は物質的な援助によって、息子は出家して得られた功德によって報いることが期待されており、娘たちによる送金はそうした報恩のひとつとして捉えられているのである。このような母親への報恩ないし返礼は、「母乳代」と呼ばれている。ただし、娘たちはこれを義務だとは考えていない。村では、ゴシップを含む村人についてのあらゆる話題が隣人どうしの会話でとりあげられており、子供たちは日々そうした会話にふれることによって、また母親を手伝って家事などの仕事をこなすことによって、報恩の「ローカリティ」を身につけていく。そして、娘は強制されることもなく、当然のこととして母親への経済的援助を志向するようになるのである。

東北タイの農村コミュニティでは、娘は息子に比べて母親との間により密接な関係を構築しており、婚姻をはじめとする様々な点において母親の管理下に置かれている。しかし、移動労働する娘たちは、村とは全く異なる環境のなかで生活することにより新たな価値観を身につけ、その「ローカリティ」を変容させてもいる。彼女たちは、一方では母親や移動先の同村出身者との関係をとおして村の規範を継続させながら、他方では都市での自由な生活を楽しんでおり、二つの局面のあいだで揺れ動いている。そのような過程は、彼女たちが村とは異なる主体へと成っていく過程としてみることができる。

⑨松田素二（研究分担者、京都大学）‘Local Community and Environmental Conservation: “Think Globally, Act Locally” Reconsidered’

松田は、滋賀県の琵琶湖河岸、ヒマラヤ山脈麓、そしてタイのローカル・コミュニティを事例として、従来の環境保護論を再検討しつつ、森林河川保護におけるコミュニティの持つ潜在力を探求する。環境問題は「犯罪者-被害者」二分法を経て、今日、人類全体に共通する問題・地球規模の問題として認識されている。そこでは「グローバルに考え、ローカルに行動する」といわれるように、破壊者でもあり被害者でもある1人1人の人間が環境への影響を考慮して自覚的に行動することが求められ、環境保護の正義は自明のものとしてとらえられている。

しかし、西洋的思考の産物であるこのような無批判の自明性とそれに基づく科学的・合理的地球環境保護論とは別に、ローカル・コミュニティは日常生活

世界のなかで森林や河川を保護するシステムを独自に発達させてきた。それは政治、経済、環境が一体化した人々の生活に埋め込まれた知識と実践である。著者はこのような住民の生活システム、土着の知恵を優先的に取り入れた環境保護のあり方を「生活環境保護論 life environmentalism」と表し、例えば森林保護区域を設定して地元住民の介入を排除するような西洋型の合理的環境保護論とは別の可能性を検討する。ヒマラヤ山脈麓や北タイの事例では、住民は西洋型の環境保護ないしそれに影響され成文化されたコミュニティの規則によって木材伐採やコミュニティ林への介入が制限されるが、彼らはそれを受け入れながらも時に反故にし、生活の場で従来のように森林資源を利用している。しかし、生活の場である限り、そうした規則違反の利用が無制限の破壊にいたることはない。本論文では、幻想化や無条件の肯定を避けつつ、ローカル・コミュニティを中心にすえたもう一つの環境保護のあり方が提示される。

⑩Surasom Krisnachuta (海外共同研究者、ウボンラーチャターニー大学) 'Communities of Negotiation: Livelihoods Tactics of "Isan" Peasant'

スラソムは、東北タイのウボンラーチャターニー県ヴァリンチャムラップ郡近郊の農民コミュニティを対象に、その性質を分析する。同地では、1969年からこれまで、外部から新たに移住してきた富裕者たちと地元農民とのあいだに土地所有権をめぐる対立が続いてきた。書類上は土地を購入し所有している富裕者に対して、自らの生存基盤である土地の利用・所有権の返還を求めて一部の農民グループが土地権闘争を展開してきたのである。著者はこれを農民の「生計戦略」の一端として位置づけ、東北タイにおける農民コミュニティについての「統合され、調和がとれ、固定的で構造化された空間」という従来の見方を斥け、代わりに「生計を保護し発展させるための交渉空間」として再概念化する。

このような農民コミュニティの特質は、現代における新たな現象ではなく「自給自足経済社会」、「部分的商業化社会」、「近代化社会」のいずれの歴史的過程においても見出されるものである。自給自足経済社会においては、食糧と栄養を確保するための生計戦略として、人は移動し、他者と交渉し、魚、岩塩、米、そして労働力を交換していた。コミュニティは雑多な地域からやってきた人々の集まりであり、文化的多様性を有していた。そこで彼らの相互扶助経済を支

えていたのは宗教的倫理ではなく、生計戦略である。そして、1930年代に鉄道が敷設され、1940年代から部分的に商業化する中でもそうした食糧交換は続いてきたが、1980年代には市場での食糧購入がこれに替わるようになった。国民国家と資本主義に取り込まれた近代化社会においてもまた、彼らは家族、コミュニティ、コミュニティ・ネットワーク、土地権闘争グループといった農民コミュニティ内部の様々なレベルにおける主体や、企業家や政府などの外部の主体とのあいだでの交渉を繰り返すことによって自らの生計を保護し発展させようとしている。

そして近年、土地権闘争に参加する農民グループは、NGO、知識人、他の草の根運動、良心的な弁護士や行政機関、マスメディアの支援によって自らの要求を表明していく技法を学習してきたが、それにより彼らは自らの生計戦略、特に自給自足経済社会における生計戦略（相互扶助）を意識的に言説化し、土地権闘争の目的を「生計を守るための運動」として位置づけることによって、優位的立場を確保している。

⑪高井康弘（研究分担者、大谷大学）‘Between a Vietnamese and a Thai Citizen : A Case Study of Second-Generation Vietnamese Thai Immigrants in Nongkhai’

高井は、第二次世界大戦後、ラオスを経由して東北タイのノンカイ県に難民として移住してきたベトナム人とその子孫のコミュニティを対象に、特にタイへ来てから生まれた第二世代に焦点をあて、彼らがベトナムとタイの間で自らのあり方を模索しながら他者との関係を構築していく現在の状況を分析する。タイ政府は、1950年代から1980年代にかけての戦後レジームにおいてベトナム難民に対し活動を制限する政策をとってきたが、1980年代半ばからの開発期ではその制限的性格を弱め、1992年には第一世代に対して外国人身分証を、第二世代に対してタイ国籍を付与することを認めた。現在、第二世代の多くはタイ国籍を取得しており、ベトナム系タイ人として国民の権利を保障されている。また、タイ国籍を取得したことで土地の購入が可能になり、そのことは彼らの事業経営を有利に展開させてもいる。

そのような背景のもと、戦後レジームを労働者として生きた第一世代は制限政策のもとで貧しい生活をおくったが、記憶と困難を共有し、同じ境遇にある

ベトナム難民のあいだで相互扶助ネットワークを発達させてきた。そして、そうした相互扶助ネットワークのなかで育った第二世代は商店や食堂などの小規模事業に着手し、彼らの子供たちである第三世代に高等教育を受ける機会を提供した。第三世代の子供たちのなかにはバンコクや他県の大学を卒業して就職し、ノンカーイ県のベトナム系住民コミュニティを離れる者も多く、第二世代の親たちのなかには、子供たちがベトナムの言語や文化に関心を示さずタイ人化することに対して両義的な感情を抱く者もある。また、タイ国籍を取得することによって国外への移動が自由になった第二世代の人々は、ベトナムに親戚を訪ねて旅行するようになった。

ベトナム人である第一世代と、タイ人として学校教育を受けて育った第三世代にはさまれて、第二世代の人々はベトナムとタイの両方に対する帰属意識を有している。彼らはタイ人としてタイ社会との関わりを深めながら、同時にベトナム系住民の間、また本国ベトナムとの間の関係を構築しようとするが、その一端に、1998年以降、タイ政府からの許可を得て、第一世代からの水面下における相互扶助ネットワークのうえに設立された2つのベトナム系住民組織と「ノンカーイ県ベトナム協会」がある。ただし、こうした組織には加入しないベトナム系住民も多く、彼らの志向は多方向的なものである。

## (2) 本研究の成果・意義・今後の展望

この研究では、コミュニティが内部の差異と多様性を保持しながら、外部からの介入に対する抵抗や交渉のなかで多面的に自らを生成変化させていく過程に焦点をあてる。この研究の主な理論的、実証的な成果を、以下のごとく3項目にわたって提示してみる。

### ① コミュニティの構成

この研究が対象とするコミュニティとは、均質で同一的な集合性を意味するのではなく、個々人のあいだで差異化した多様な欲望、ニーズや想像力を内包する実体である。それはすでに構成された制度や規範ではなく、人びとが自らを構成していく過程を指している。ここではそうした新たなタイプの集合性を「生成的コミュニティ」と呼ぶが、その典型的な事例は、東北タイ農村からの

移動労働者たち、東北タイのベトナム系移民コミュニティなど、国内外を含む移動の激化と流動性のなかで形成されたコミュニティのなかに認めることができる。人びとの移動はしばしば元のコミュニティからの排除や放逐によって発生する。ダム建設や森林国有地化によって追放されクーバー（仏教聖者）のもとに結集したカレン人、新仏教サンティ・アソークのコミュニティに吸収された都市の下層中間層や農村の貧困層、またH I V感染で追放され北タイのエイズ自助グループを形成した人びとなどがその例である。

コミュニティが構成されていく過程は、さらに森林や耕作地などの資源管理をめぐる浮かびあがってきた。北タイ農村の「コミュニティ森林」、北タイ・パーイのカレン人の森林管理、あるいは東北タイ・ウボンラーチャターニーの貧困農民の土地権をめぐる闘争などがその例である。それらにおいては、NGOの資源保護論や資本の近代的所有権に対して、農民独自の生活・生計戦略としての森林・土地利用の権利に関する主張が顕著に見られる。こうした生活・生計戦略の展開は、伝統的な知恵の復興であるよりも、人びとが資本や政治権力に対峙しながらコミュニティのもつ協同性を自ら活用していく過程として捉えるべきである。

## ②コミュニティと外部

人びとが欲望を解き放ちニーズを実現させる過程において、コミュニティは国家、行政、企業やNGOなど外部との対立、闘争、交渉や連携を経験する。すでに見たように、北タイにおける森林の資源管理をめぐる外部の開発企業とのあいだで、また東北タイでは、土地利用権をめぐる外部からの移住者とのあいだで対立がつついている。こうした資源管理をめぐる対立では、国家の行政機関への訴えのみによる解決法はかならずしも有効とは限らず、コミュニティ内部での生活戦略に立返るとともに、NGOや草の根運動、研究者やメディアなどとの連携による抵抗と交渉の必要性が強く示唆される。

この研究が対象としたタイとカンボジアのコミュニティの多くは、その形成や展開においてNGOの活動と関係している。国際NGOにしばしば見られる硬直化した近代人権思想や合理的環境保護論は、コミュニティの差異化した多様なニーズを必ずしも体现するものではない。他方、タイにおいて1980年代から急速に形成された国内NGOの活動は、この研究の多くの事例に見られるよ

うに、新しいタイプのコミュニティが内部の多様性を保存しながら外部の権力に対して抵抗し交渉していく過程で不可欠な要素となりつつある。

### ③コミュニティと生成変化

この研究が対象とする新たなタイプのコミュニティは、ある種の寄せ集めの「アセンブレッジ」であり、そこでは身体的な情動、および言説的な表出の双方が人びとの関係性を形作っている。このようなコミュニティは、しばしば周縁的な位置を占めながら生成変化することで、マジョリティとは異なる新たな生とその実践の様式を展開していく。

東北タイのプータイ人の霊媒コミュニティでは、慢性病に悩むメンバーに精霊が憑依するが、その人はしだいに精霊と共存する身体を獲得し霊媒へと生成変化していく。そこには病者・霊媒・コミュニティ内外の人びととのあいだの「情動的コミュニケーション」が強く働いている。また北タイのクーパー崇拜コミュニティでは、人びとはクーパーの身近に寄りそってその力を得ようとし、そこには情動的な相互作用によって互いに強め合う関係が見られる。

さらにこの研究が注目したのは、多くのコミュニティでは情動的作用と言説的表出の双方が一体となって新たな実践の可能性が追求されることである。カンボジアでクメール・ルージュ特別法廷への人びとの参加を支援するNGOは、虐待被害者の記憶を蘇らせることによって情動的な結合を作りだすとともに、メディアを通じて権力介入による解体の危機を乗り越えてきた。北タイの民間治療師のネットワークは、キャンペーンをとおして民間医療の可能性を追求するが、そこには「人助け」という情動的、贈与的な医療倫理が強く底流している。また北タイのエイズ自助グループは、ウイルスと社会的排除と闘うために多様なキャンペーンを展開するが、グループ内外での情動とケアの関係性の構築がそれを支えている。

以上のように、この研究は、今日の東南アジアの新たなコミュニティ現象が直面している諸局面を明らかにするという所期の目標を達成できたと考える。我々は、新しいコミュニティという集合のなかで人びとがいかに行為し、そこにいかなる関係性や協同性を形成していくかという問いについて、フィールドワークのデータに基づく多様な民族誌的事例から検討してきた。そうしたミク



ロレベルの研究は、政治的・社会的な流動性と不確定性が高まるなかでのコミュニティに関する研究にとって不可欠な分析視点を提供するものであり、東南アジアを対象とする人類学だけでなく、今日の社会科学全体に対する貢献である。

最後に、今後の展望についてであるが、コミュニティの生成変化の局面に注目するならば、個人はマジョリティとは異なるマイノリティの道に突き進む。では、コミュニティが共通の目的を追求するような「運動」に発展した場合、そこでは内部の個人の差異と多様性はいかに保持されるだろうか。今日のコミュニティの研究は、運動としての展開を視野に入れながら幅を広げる必要があると考えられる。